

日中韓比合同アクティブラーニング・セミナーにおける「学び」
 企画・運営・実施・参画の観点から
 Active Learning among the Students from Japan, China,
 Korea and the Philippines
 —from the Perspective of Planning, Management, Implementation
 and Participation—

久保田真弓（関西大学総合情報学部）

要旨

関西大学からグローバル奨学金を得て、関西大学の協定校、華南師範大学、漢陽大学、ブラカン州立大学から大学院生および学部生各6名ずつを招聘し、日中韓比合同アクティブラーニング・セミナーを2017年10月29日から11月4日の日程で実施した。セミナーの目的は、情報学を研究する4校の大学生と大学院生が、ジェンダーについてさまざまな視点からワークショップ形式で理解を深めると同時に、英語でのディスカッションやプレゼンテーション・スキルを身に付けることである。

そこで、本研究では、ジェンダーについて学ぶことを狙いとした日中韓比合同アクティブラーニング・セミナーを対象にその教育的意義を検討することを目的とする。セミナー運営委員会の議事録、参与観察、フィールドノート、アンケートをもとに分析、考察した。その結果、教師の役割、コミュニティの形成、学生の関与の観点から論証できた。最後に「教える」－「学ぶ」ではなく、「かかわる」－「学ぶ」の構造でアクティブラーニングの効果を見る必要性を提言した。

キーワード ジェンダー、アクティブラーニング、ワークショップ、異文化交流／Gender, active learning, workshop, intercultural exchange

1. 研究背景

1.1 アクティブラーニングの位置づけ

大学教育において教授主体から学習者主体への転換が推奨されて久しい。溝上(2014)は、ポストモダン教育においては、教授パラダイムから学習パラダイムへの転換が必要であることを提唱している。溝上は、Barr & Tagg(1995)をもとにして、「教授パラダイムは、『教員から学生へ』『知識は教員から伝達されるもの』を特徴とするのに対して、学習パラダイムは、『学習は学生中心』『学習は産み出すこと』『知識は構成され、創造され、獲得されるもの』を特徴とするもの」(p. 34)であるとまとめている。そして、教師の「役割の

性質」という観点では、以下のような違いを紹介している(溝上, 2014, p.37)。

教授パラダイムの「役割の性質」

- 教員と学生は独立して、切り離されて行動する。
- 教員は学生を区分する。
- スタッフは、教員や授業プロセスを支援する。
- 専門家なら誰でも教えることができる。
- 縦の統治であり、独立した行為者である。

学習パラダイムの「役割の性質」

- 教員は基本的に学習方法や環境のデザイナーである。
- 教員と学生は相互に、そして他のスタッフと

チームで仕事をする。

- 教員は学生一人ひとりのコンピテンスや才能を育てる。
- すべてのスタッフは学生の学習や成功を産み出す教育者である。
- 学習を推進することは挑戦であり、複雑なことである。
- 共同統治でありチームワークである。

このように教授パラダイムから学習パラダイムに転換するということは、学習者だけの問題ではなく、教師自身の役割も大幅に変わるということである。そして、このような学習パラダイムで重要な取り組みのひとつとなるのがアクティブラーニングだという。アクティブラーニングとは、「一方向的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと、能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」（溝上, 2014, p.7）と定義されている。学生が「活動に関与」し、「あらゆる能動的な学習」に従事し、「認知的プロセスを外化する」ことが重要な観点である。

このようなアクティブラーニングは「カリキュラム・コース（授業科目）に関連してなされる授業（教室）内外での学習のしかたに言及する学習概念である」（溝上, 2014, p.35）。一方、アクティブラーニング型授業は、アクティブラーニングを取り入れた授業として区別され、教授学習の概念の用語として扱うことが提唱されている（溝上, 2014, p.14）。

そこで、アクティブラーニング型の授業運営では、アクティブラーニングを意識し、授業にグループ学習、発表、討論、などをいかに取り入れるかなどに着目されがちだが、たとえ講義形式をグループ討論に変えても、「学生の学びの質の格差」は、講義と同様にアクティブラーニング型授業においても起こっているという（森, 2015, p.53）。具体的には、フリーライダーの出現、グループワ

ークの非活性化、思考と活動の乖離が見られるという。

また、亀倉（2015）は、「学生のやる気を育成する」ことに着目し、失敗学を土台に中部圏の23大学から収集したアクティブラーニングにおける失敗事例を基にマンダラを制作し、その活用方法を提示している。具体的には、事例から「失敗行動」「失敗原因」「失敗結果」のマンダラを作成し、そこから①学習の目的、②講師の介入、③成績の評価の3観点で授業を改善することを提言している。

これら先行研究の示唆するところは、単にアクティブラーニングとしてさまざまな手法を取り入れてただけでは効果は薄く、教師の役割の見直し、やる気を引き出す工夫、動機付けの見直しについても同時に考慮していく必要があるということである。

そこで、松下（2015）は、「ディープ・アクティブラーニング」を提唱し、学びの質にこだわり、深い学びを「深い学習」「深い理解」「深い関与」の系譜で捉えている。そのうちバークレー（2015）は「深い関与」を促す条件として動機づけとアクティブラーニングの相乗効果を狙って次の3つを挙げている（p.83-86）。

- 課題は適度にチャレンジングなものであること
- コミュニティの感覚
- 学生がホリスティックに学べるように教えること

バークレーは、教師として「権威主義的な役割を引き受けることからなるべく離れる」（p.83）ことで真の学習コミュニティの感覚を形成しようとしていた。

すなわち学生の「深い関与」を考えるならば、教師自身が学生とどのように対峙するかを考え直さなければ実現しないのである。

このように学生のアクティブラーニングを保

証するためには、教師自身も担うべきその役割を変え、学生とのコミュニティ形成に寄与しなければ、深い学習に導くのは難しいことが分かる。

1.2 ワークショップ

上記の通りアクティブラーニングは、学習パラダイムのもとに授業の一形態として推奨され、学習者主体の学びがどのように育成されるかに着目して、研究がなされている。一方、授業ではなく、一般人を対象とした学びの手法として、ワークショップがある。

刈宿・佐伯・高木 (2012) は、ワークショップの目的として「コミュニティ形成のための他者理解と合意形成のエクササイズ」(p.98)と定義している。またその方法の定義は「講義など一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験して共同で何かを学びあったり創り出したりする学びと創造のスタイル」(p.98)としている。つまり、ワークショップでも参加者による学びの「コミュニティ形成」は目指されており、参加者は、能動的に活動に従事することが求められていることが分かる。このようなワークショップ作りでは、「協働性」「即興性」「身体性」「自己原因感覚」がグランドデザインの要件として挙げられている(刈宿・佐伯・高木、2012、p.72)。

本稿では、課外活動としての、また一度きりで開催されるということで日中韓比合同アクティブラーニング・セミナーをワークショップという枠組みで捉えることとする。

1.3 ジェンダー問題

ジェンダーとは、「社会・文化的に作られた性」で「生物学的な性」であるセックスとは、異なる概念である。セックスは、身体的な違いであるが、ジェンダーは、「心理的、行動的、社会的、制度的、文化的な側面における違いである」(宇井, 2016, p.1)。しかし、日本語では共に「性別」で訳されたり、ジェンダーの違いはセックスの違いによるものと固定的に捉えられたりし、身近な問題であ

るわりには、理解されにくい。その一つの要因として、ジェンダー問題を語る際には、自分自身が、男性、女性、またはLGBTのいずれかの区分に属していることを意識して語る必要があるので、ジェンダー問題を捉えにくくしているのではないかと考える。つまり、中国人と韓国人との異文化コミュニケーション摩擦についてならば、日本人は、当事者にならずに客観的に扱うことができるが、ジェンダー問題に関しては、当事者として語ることになり、話題にしにくい。しかし、ジェンダーは、「社会・文化的に作られた性」であるので、社会・文化的な背景が異なる者同士ならば、自分の経験を語ることによってでも視点の違いが浮き彫りになることが期待できる。

そこで、本セミナーの内容として「ジェンダー問題」を扱うこととした。

世界経済フォーラムが、2017年11月に発表した「ジェンダー・ギャップ指数報告書」によると日本は、0.657(0が完全不平等、1が完全平等を意味する。)で順位は、144か国中114位であった。ジェンダー・ギャップ指数は、経済参画、政治参画、教育、健康の4つの分野のデータから作成されており、日本は順に144か国中、それぞれ114位、123位、74位、1位であった。すなわち教育や健康では、進んでいるが経済参画や、政治参画では、極端に女性の進出が遅れている。ちなみに、1位はアイスランドで、0.878である。フィリピンは、0.790で10位、中国は、0.674で100位、韓国は、0.650で114位である。

このような背景があるので日本、韓国、中国、フィリピンからの学生が自らの体験を踏まえて比較ができるジェンダーについてのワークは、教育的に適当であると考えられる。

ジェンダー化は、子どもときの養育環境から、女子は女の子らしく、男子は男の子らしく育てられるなどしていくうちに、社会通念に沿った個人が形成される傾向をさす(青野, 2016)。例えば、ランドセルメーカーが、小学1年生とその保護者を対象に将来就きたい職業、就かせたい職業を調

べているが、2017年の調査結果は、女子の1位は、ケーキ屋・パン屋、男子の1位は、スポーツ選手だった(クラレ, 2017)。そして10年ぶりに女子の3位に看護師が入ったという。青野(2008)は、このような傾向を踏まえ、さらに、中高生を対象として調査し、「希望する職業にはかなりの男女差が見られ、小学生のころの希望がもとになってしだいに現実的な職業へと移り変わっている様子」を見て取っている。そして、「小中高と培われた将来のイメージが、最高学歴である大学生の専攻分野の偏りに帰着する」(青野, 2016, p.38)と述べている。

したがって、大学生がジェンダーの視点について学習することは、自分の過去を振り返ることであり、4か国からの参加者から有意義な討論を引き出せる身近なトピックであると考えられる。

2. 研究目的

関西大学からグローバル奨学金を得て、関西大学の協定校、華南師範大学、漢陽大学、ブラカン州立大学から大学院生および学部生各6名ずつを招聘し、日中韓比合同アクティブラーニング・セミナーを2017年10月29日から11月4日の日程で実施した。

セミナーの目的は、情報学を研究する4校の大学生と大学院生が、ジェンダーについてさまざまな視点からワークショップ形式で理解を深めると同時に、英語でのディスカッションやプレゼンテーション・スキルを身に付けることである。

そこで、本研究では、ジェンダーについて学ぶことを狙いとした日中韓比合同アクティブ・ラーニング・セミナーを対象にその教育的意義を検討することを目的とする。特に、教師の役割、コミュニティ形成、学生の関与の観点から検証する。

3. セミナーの運営体制と準備

3.1 運営委員会

本セミナーを開催するにあたり、企画・運営・実施に当たる運営委員を、大学院生2名、研究生

1名、学部4年生2名、3年生3名と教員1名の合計9名で結成した。さらに、セミナー実施に当たっては、運営委員に属さない残りのゼミ学生全員すなわち、4年生14名、3年生9名、大学院生1名が関わることにした。特にセミナーは、平日の5日間にわたったので、学生は、自分の授業と重ならない範囲でシフトを組み、ワークに参加する人、運営実施に携わる人を決めた。

セミナーの準備及び運営としては主に次のような仕事がある。

- ・中国・韓国・フィリピンの参加者との連絡
- ・中国、フィリピン、ビザ申請のための書類の準備と対応
- ・宿泊所の手配
- ・利用する交通機関の下調べ
- ・ポスター作成・パンフレット作成
- ・能楽堂見学にあつたての予約や準備
- ・京都観光のための資料作成
- ・参加者の買い物などのアテンドおよび情報提供
- ・国際空港での出迎えと見送り
- ・運営者・実施者・参加者シフト作成と日程調整
- ・会計
- ・会議中の司会と議事録作成

これらの仕事を運営委員が随時采配を振るい、他のメンバーに仕事を割り振ったりし、こなしていった。

結局、運営委員会は、8月16日から10回開催され、企画・内容の詳細を詰め、セミナー開催後に1回開催し振り返りとまとめをした。

3.2 セミナーの準備

ポスター作成

女性のイメージカラーである紫を基調に学生はポスターを作成した(図1)。このポスターの柄をシンボルにセミナーを実施し、セミナー開催の意識を高めた。ポスターをA0に印刷し、関西国際空港での出迎え時に使用した。また、ワークで説明するパワーポイントの基調に使用したり、パンフレットに使用したりした。



図1 ポスター

パンフレット作成

学生は、参加者に配布するパンフレットを作成した。合計 22 ページで、セミナーの趣旨説明、運営委員の紹介、中国、韓国、フィリピンからの参加者名簿、開催地の地図（行き方）、緊急連絡先そして、日々のワークで学んだことをメモできるように 1 日 1 ページの日記風ページがある。

4. 日中韓比合同アクティブラーニング・セミナーの概要

4.1 セミナーの概要

4.1.1 セミナーのデザイン

セミナーは、初日に開会式をし、アイスブレイクから始め、ワークショップ 1、2、3、4 と最終日に学びの振り返り、3 日目に京都観光、5 日目に関西大学学園祭観察で構成した（表 1）。セミナーの内容は、ジェンダーに視点を当て、ワークショップ 1「ジェンダーとメディア」、ワークショップ 2「ジェンダーと教育」、ワークショップ 3「ジェンダーとキャリア」、ワークショップ 4「ジェンダーと社会」とした。最終日には、これら 4 つの観点で学んだジェンダー問題について振り返り、それをパワーポイントにまとめて発表するという

デザインにした。なお、セミナーはすべて参加者の母語ではない英語で行われたため、できる限り可視化できるところは、それを意識したワークにし、話し合いでは、ワークシート、イラスト、写真、付箋等を利用し、それらを媒介に話し合うという形式にした。

また、時には立ったり、動いたりして身体を使ったワークを意図的に取り入れた。各ワークショップでは、6 班に分かれた協働作業が多々あったが、班員は、毎回変えて構成した。

表1 日程表

日程	内容	場所
10/29 (日)	午後 関西国際空港到到着	関西国際空港
10/30 (月)	午前 開会式・アイスブレイク	高槻キャンパス
	午後 ワークショップ1「ジェンダーとメディア」	
10/31 (火)	午前 金剛能楽堂にて能体験	京都
	午後 京都御所、錦市場、京都市内観光振り返り	高槻キャンパス
11/1 (水)	午前 ワークショップ2「ジェンダーと教育」	千里山キャンパス
	午後 ワークショップ3「ジェンダーとキャリア」	
11/2 (木)	午前 学園祭 参加	千里山キャンパス
	午後 ワークショップ4「ジェンダーと社会」	梅田キャンパス
11/3 (金)	午前 ジェンダーについてセミナーの振り返りとまとめ	高槻キャンパス
	午後 グループごとに発表、閉会式	
11/4 (土)	午前 関西国際空港出発	関西国際空港

4.1.2 ワークショップの企画・実施

各ワークの内容については運営委員のなかで担

当を決め、その学生が中心となり企画書を書き、皆で話し合いながら詳細を練っていった(表2)。

表2 企画書の例

	ワークショップ1 「ジェンダーとメディア」
13:00~	<ul style="list-style-type: none"> ■ ジェンダー×メディア① ■ 流れの説明【5分】 ■ 導入【30分】 <ul style="list-style-type: none"> ・おもちゃの広告を見せ、ジェンダーについての導入を行う。 ■ 班内でCMの共有【40分】 <ul style="list-style-type: none"> ・ジェンダーに関するCM(子育ての様子が表現してある広告)を紙媒体で各国持ちよってもらい各班3分でプレゼンを行う
14:15	<ul style="list-style-type: none"> ■ 休憩【15分】
14:30~	<ul style="list-style-type: none"> ■ ジェンダー×メディア② ◆ 用意した日本の子育てのCMを見てワークシートに記入【15分】 ◆ 各班母親目線、父親目線の視点からCMを見て、感じたことをワークシートに記入【20分】 ◆ このCMが称賛、批判される理由をワークシートに記入【20分】 ◆ 話し合ったことをもとに子育てのCM案を考え、絵コンテを書く【30分】 ◆ 各班3分でプレゼン【30分】 ■ ジェンダー×広告のまとめ【20分】 <ul style="list-style-type: none"> ・ジェンダーとメディアがどう関わっているのか(いろいろなメディアから影響を受けている) ■ この後のタイムスケジュールの確認【5分】
16:50	

企画が決定した後は、パワーポイントを英語で用意し、それを英語で説明する練習をした。

各ワークショップは、それぞれ2、3時間と長いので、ワークシートを用意し、流れをまとめたり、ディスカッションのポイントを絞ったりできるよう工夫された。

以下に各ワークショップの概要と主要な結果を述べる。

4.2 ワークショップの概要

4.2.1 「ジェンダー」導入のワーク

自己紹介等のいくつかのアイスブレイクをし、お互いに打ち解けたところで、グループに分かれて、「人生の川」を書いてもらった。自分の人生を川にたとえて流れを書き、「ジェンダー」について気が付いたことや思い知らされたエピソードをイラストで記入してもらった。

その結果、「人生の川」のワークでは、韓国の男子学生は皆、徴兵に行っているの、同じ学年でも2つ年上であることが分かったり、その経験が戦闘機などで描かれたりした。一方、フィリピンの教育制度は、6-4制(2012年度まで。以後順次K-12に移行中)だったので、同じ学年でも2つ若いことがわかる。

参加者の中には、日本のアニメーションが好きで、イラストが上手なものもあれば、そうでないものもあるが、話し合いでは情報を補えるので、とくに絵の良し悪しは関係ないことを伝え話し合った。

各参加者は1グループ4人で6グループに分かれて話し合ったので、お互いにかなり打ち解けた雰囲気になっていった。

4.2.2 ワークショップ1「ジェンダーとメディア」

導入として、男子と女子のおもちゃが掲載された広告写真を見せ、色遣い等について自由に意見交換した(図2:女子用おもちゃはピンク、男子用おもちゃは青色がベースになっている)。



図2 おもちゃの広告

次に、赤ちゃんのおむつのCMを見せた。シングルマザーが、悪戦苦闘しながらも仕事と子育てに頑張っている姿をストーリー仕立てで示した2分の動画で、配信後、彼女の描かれ方について賛否両論出た広告である。これをもとにメディアで構成されるジェンダー問題について母親の視点、父親の視点で見て感じたことなどを中心に話し合った。

また、各国で紹介されているもので子育ての様子が表現してある広告を紙媒体で持ってきてもらい、それを互いに紹介し、分析した。

例えば、韓国からは、飲めば背が高くなるという薬の広告があった。かつて男子は、180cm以下なら負け組だというのがはやったそうで、その延長線上にある製品だそうだ。それだけ、韓国では、美や容姿にこだわっていることが伺えた。

4.2.3 ワークショップ2「ジェンダーと教育」

本時では、これまで各々が過ごしてきた学校での体験をふりかえり、固定的な性別役割や思い込みなどに縛られていたことはないかを考えた。また、

多様な性の人がいるということを認識し、多数派が正しいという考えに捉われないように教育するにはどうすればよいかを考えることにした。小グループの討論では、初等教育、中等教育、高等教育の担当に2班ずつ割り振り、6班に分かれて、ワークシートに沿ってどのようなジェンダーの規制があるのか話し合い、一覧表を作成した(図3)。

規則、クラブ活動、科目、イベント、制服という軸を決めて4か国で比較することにより共通点や相違点が明確に浮かび上がった。例えば、規則では、フィリピンでは男子はイヤリング禁止、中国では、男子はビール禁止、など日本とは違う発想のものがあり、社会・文化的習慣の違いが、垣間見られた。一方、科目に関しては、男子が理系、女子が文系という同じような傾向もみられた。

	韓国	日本	フィリピン	中国
Rule
Club activities
Subject
Event
Uniform

Junior High School Group No. 3

図3 学校教育にみるジェンダー

4.2.4 ワークショップ3「ジェンダーとキャリア」

日本女性の労働力率は、M型曲線と呼ばれ、結婚出産期に一旦下がり、育児が落ち着いた時期に再度上昇するという傾向が欧米諸国に比べ非常に強く特徴的だといわれている。そこで、M型曲線のグラフや、ジェンダーギャップ指標などさまざまな統計データをもとに討論した。例えば、クイズ形式で以下について聞き、実際に10段階の指

標別に立ってもらい、各国の学生のそれぞれの意見がすぐに見えるように工夫した。なお、同意するが1、同意しないが10である。

- 1)妻の収入が夫より多いと問題が起きる。
- 2)男は女より良い政治のリーダーである。
- 3)妻は家事をするべきだ。

その結果、2)の答えが一番分散した(図4)。これらの結果をもとにそれぞれの意見の理由を聞き、討論した。フィリピンや韓国では、女性の大統領も輩出されており、政界に女性リーダーの存在があり身近なので、さまざまな意見を聴くことができた。

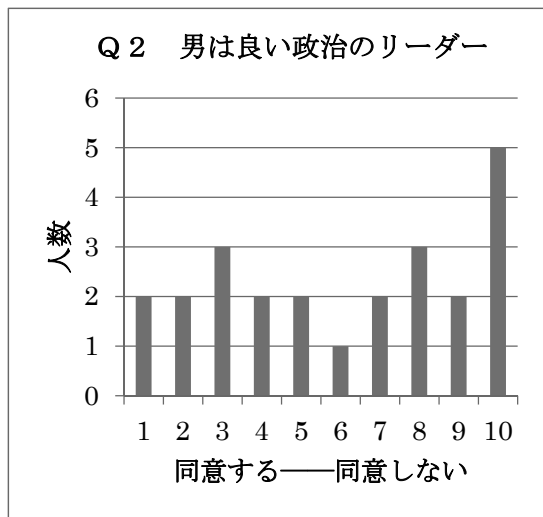


図4 政治のリーダー

4.2.5 ワークショップ4「ジェンダーと社会」

午前中は、関西大学の学園祭に行き、ジェンダーの視点で人物を観察し、iPad ミニで写真を撮ってくる課題を出した。それを持ち寄って午後に、「ジェンダーと社会」のワークショップを始めた。普段暮らしている生活の中にも、ジェンダーの問題がたくさんあるということに気づくことを狙いとしている。

次に、自分の家族または、誰かの家族を想定して、各家族のメンバーが、どのような仕事をしているかを一覧表にし、男女の日常の役割分担に偏りがないかどうか、話し合った。この際に家族と一言で言っても同居している親戚がいたり、シングルマザーと自分と二人暮らしだったり、家族

の形態そのものも多様であることが露呈した。

さらに、予定外のワークとして、自分の名前の構成について黒板に書いて説明してもらった。例えば、参加者の名簿を見るとファーストネーム・ミドルネーム・セカンドネーム・ラストネームとなっているような長いものがあったり、韓国名だが、ニックネームを必ず()に入れて強調していたりなどである。日本では結婚すると夫婦同姓になることが法律で決められており、疑問にも思わないかもしれないが、多様な名前の付け方を知ることにより、名前とアイデンティティの問題を考える契機となった。

4.2.6 総合まとめ

最終日のワークの題材としてフィリピンのある村に住む若夫婦が、ピナツボ火山の大噴火により村を出なければならなくなり、それがきっかけで、夫の収入も不安定になる中、妻アニタは、2番目の子どもとして男子が欲しいと夫にせがまれ、無理をして体調不良のまま出産し、最後は、自分も死んでしまうという実話を取り上げた。

この事例を読んで、「蜘蛛の糸」というワークで、なぜアニタは死ななければならなかったかを考え、その原因を考えた。まず、アニタを中心に据えた円周上に皆が立った。その際に「教育」、「政治」「経済」、「セックス」、「ジェンダー」、「文化」、「社会」と書かれた7枚のカードを円状に配置し、そこにグループのメンバー7名が立った。中央にいるアニタは毛糸玉を持ち、なぜアニタが死ななければならなかったかを皆で意見を出しながら、その都度、7つのカテゴリーに当てはめていった。その際に、アニタがもつ毛糸玉から毛糸を伸ばしていき、アニタの置かれた状況が、幾重もの多様な問題からなっていることを可視化させた。図5は、中心のアニタが蜘蛛の巣にからめとられている状態を示している。



図5 蜘蛛の糸

最終日は6班に分かれ、このようなワークをしたあと、4日間で学んだことを振り返り、パワーポイントにまとめて発表した。特に、以下の3点を考えてもらった。設問ごとに発表で出した内容をまとめる。

1) このアクティブラーニング・セミナーで学んだことはなにか。

セミナー参加前はあまり意識していなかったジェンダー問題であったが、意外と身近な問題であることに気が付いた。特にメディア、教育、キャリア、社会などさまざまな分野に埋め込まれていることに気が付いた。4か国で比較することにより国によってジェンダー問題も多様であることが分かった。

2) ジェンダー問題は、どのように作られていると思うか。

先の「蜘蛛の糸」のワークショップの結果から、7つのカテゴリーを挙げているものが1名あったが、そのほかは、力関係、昔から男性が保持している権力の維持志向、文化・習慣、ステレオタイプ、生物学的な性差、異なる役割分業が、ジェンダー問題を作り出しているという。さらに、ジェンダーに関する知識不足が原因だったり、それらが世代で継承されたりもしている、という意見が出た。

3) ジェンダーフリー社会に向けて何をすべきか。

LGBT などについて早期から教育する、平等と公正を实践する、服装など自由な選択をさせる、

ステレオタイプを見直す、他者を尊敬する、など身近なところからの取り組みの提案だったり、政府の力で推進する、というようなマクロの視点に立った意見がでたりした。さらに、このセミナーで学んだことを他の人にもシェアする、ことが挙げられ、このセミナーの意義があらためて確認できたように思われた。

5. 結果と考察

5.1 ワークショップでの学び

ワークショップの初日と最終日に「ジェンダー」という言葉からイメージする単語をイメージマップに書いてもらった。その結果、初日の「ジェンダー」のイメージは、男性、女性、LGBT、服装というものだったが、最終日では、メディア、教育、差別、色、問題、平等などワークショップで扱った用語が見られるようになった。また、特徴的なものとしては、中国の学生は全員寮生活のため、寮やトイレという単語が、初日のイメージであがっていた。

中国と韓国の参加者のイメージの単語数は、それぞれ初日と最終日で、中国が、10から16に増加、韓国が、15.6から14だった。フィリピンは、台風で到着日時が変更されたため、初日のイメージマップはとれなかったが、最終日では、11.75あがった。ジェンダーという単語から引かれた線(派生数)は、それぞれ初日と最終日で、中国が、3.75から4.5に増加、韓国が、4.2から4.4に増加した。フィリピンは、7.25だった。つまり、単語数、派生数ともに、ワークショップ後は、概ね増えていた。なお、日本人参加者は、授業の関係で5日間すべてに参加できた者はいないので、データはとったが比較はしないことにした。

また、最終日には、ワークショップの感想のほかに「あなたにとってジェンダーとは何か」についてアンケートで聞いた。その結果、ジェンダーは、単なる男女の問題ではなく、教育、メディアなどが複雑に関連した問題であることが、理解できたようだ。何人かにとっては、これまで考えた

こともないトピックだったようだが、その分、ワークショップは有意義だったようだ。

5.2 教師の役割

本セミナーは、総勢 32 名の学部生と大学院生によって企画・運営・実施された。5 日間にわたるセミナーは、ワークショップごとに分担し、内容の詳細を決め、ワークシートとパワーポイントを用意し、英語での練習をして実施された。

教師は、「ジェンダーとメディア」「ジェンダーと教育」「ジェンダーとキャリア」「ジェンダーと社会」という観点を決め、おおよその内容のアドバイスをし、運営会議でのやり取りを見ながら随時アドバイスをした。担当の学生は、積極的に動画CMや統計資料などを適宜集め、企画書を作り、それを運営会議で練り直すという作業を通して完成させていった。

教師は、ワークショップ中は、常に流れを追って、実施者の説明不足のところ、参加者の理解不足と思われるところなどを意識的にチェックし、適宜介入して補足した。また、内容だけでなく、ワークショップの流れのリズムが悪かったり、参加者の態度に疲れが見えた時にも、適宜介入し、大きな声で話しかけたり、身近な事例をあげたりして、リズムの修正をした。教師は、大学の授業以外に国際協力機構が招聘する発展途上国からの研修員対象に一日ワークショップを長年にわたりしているの、多様な文化背景の参加者の態度を見抜く力があつたのでできたのかもしれない。いずれにしろ教師は教授するという態度ではなくファシリテートする役割に徹した。

5.3 コミュニティの形成

本セミナーは、学生にとって一度きりの課外活動としてのワークショップであったので、本セミナーに係ることでコミュニティが形成できるように、ポスター、ハンドアウト、ロゴ入りパワーポイントなどをつくり、それをセミナーのシンボルとして意識づけることとした。ロゴの基調となる

ポスターは、先述の通り広告作りに関心がある学生が作り、運営委員会で何回かチェックして修正しながら最終作品が作られた。作ったポスターは、参加者へ事前にメールで送られただけでなく、A0の大きさに印刷し、段ボールで裏打ちし、関西空港での出迎えの際に掲げることで、初対面でも容易に集まれるように工夫された。このように教師は、コミュニティ形成を意図してポスター作りを提案したが、それを発展させて様々に利用したのは、学生の発想である。

学生は、ワークショップだけでなく、異なるキャンパスへの移動、観光、買い物、宿泊などにもすべて手分けしてアテンドしている。そのような運営にかかわることで、参加者との意思疎通や、交渉などを学んでいる。また、今回はフィリピンからの参加者に LGBT に該当する者がおり、ユースホステルの宿泊の際に、部屋をどうするか運営者と当時者で考えるという現実の問題にも遭遇した。

韓国、中国、フィリピン、日本の学生がジェンダーについてメディア、教育、キャリア、社会の観点から話し合うということは、4か国の社会・文化的な違いが功を奏していると考えられる。同じアジア圏でも韓国の男子には徴兵制度がある、中国の学生は皆寮生活である、フィリピンでは LGBT は身近で、特別な感覚はない、などである。このようにジェンダーの感覚がそれぞれ違うので、毎日のワークショップでの話し合いは盛況だった。

また、日本に来る学生は日本のアニメーションに興味があり、その話題で日本の学生と容易にコミュニケーションが取れている。また、逆に韓国のドラマ通の日本の学生は、それを話題にすることができる。さらに、韓国の学生は、第2言語の選択で中国語を勉強しているので、中国の学生と中国語で会話している。フィリピンの学生たちは、仲間同士ではフィリピン語で話しているが、それ以外では英語で話すので、皆をリードしたり、歌や手を使ったゲームをたくさん紹介したりすることがあった。このように4か国の交流場面では、予想以上にコミュニケーションが弾み、日を追う

ごとに仲良くなっていくのが見て取れた。日本人学生も数名だが参加学生と一緒に宿泊したのでなおのこと仲が良くなっていった。

このようにシンボルを利用してセミナーを意識付け、かつ、長時間にわたって参加者に付き添ったことが、学生間でコミュニティを形成したことに繋がったと考えられよう。

5.4 学生の関与

通常の大学授業では、アクティブラーニングを取り入れても、先述の通り動機づけややる気に問題があることが指摘されている。しかし、本セミナーでは、授業のように評価も単位もないのに、皆積極的に参加者とかかわり、ワークショップにも意欲的に参加し、最終日は別れを惜しむほど仲良くなっている。なぜこれほどまでゼミの学生や大学院生は、動くのであろうか。

佐伯(2014)によると、人はそもそも「かかわりあう」存在だという。人は、赤ちゃんの時から養育者と関わり合いながら、成長してきた。その際に「かかわり」を第三者として見るのではなく、養育者の視点で見ることによって、かかわり方が変わり見えてくるものがあるという。つまり、三人称的に観察して理解するのではなく、二人称的なかかわりをして「感じ取る」必要があるという。

二人称的なかかわりとは、1) 対象を情動的存在(よろこんだり、笑ったり、悲しんだり、怒ったりする存在)とみなす。(いわゆる「知的」側面だけを見るのではなく、情感あふれる姿を見る)。2) 対象はかかわる人のかかわりに「応える」存在(つまり、こちらのかかわり方次第で、まったく違った反応を示す存在)とみなす。3) 対象は基本的にたのしい、うれしい、面白い、「応答的關係」を求めている存在とみなす、ことである(佐伯, 2014, p.48)。人は他者と関わり共愉的關係を作り出すので「学ぶ」ことになるという(佐伯, 2014)。その意味で本セミナーでも学生には、さまざまなかかわり方があった。そもそも教師と学生とはゼミ生としての関係性が基底にある。さらに、運営委員

会のリーダー(学部4年生)は、前年度も日中韓比合同アクティブラーニング・セミナーに関わっており、その時にリーダーだった大学院生のもとで学んだ運営のノウハウがあったからこそ今回は、率先してリーダー役を務めた。

フィリピンからの参加学生は、前年度ゼミ生がフィリピンヘスタディツアーで行った際にホームステイさせてくれたメンバーである。一年前からのかわりか、本セミナーでの再会を動機づけている。

会計係は、初めての仕事であったが、個別に学生と対応し、日々お金の徴収と分配等をして、それをすべて記録した。そのような日々の努力で会計の役割を全うしたことが本人の自信に繋がっている。

韓国と中国の学生は、日本の学生と初対面だが、教員同士は、長年にわたり大学院生の発表会を年に一度開催し交流している間柄である。したがって中国からの大学院生が、たびたび中国にいる自分の指導教官の近況を教師にしてくれると、その話題で教師は初対面でも中国の参加者に親密感を覚えられた。

このように各参加者は、それぞれの立場からかわる相手がいたので、その相手に応えようとして互いに動機づけられ動いたのだと思われる。セミナー終了後も Facebook, LINE, WeChat などさまざまな SNS で繋がっている。

このような様々なかかわりの場を作れたのは、セミナーの大部分を学生の自由裁量に任せて運営・実施させたことに関係があるだろう。それがおのずと責任感を生み、意義ある行動に促せたと考える。

6. まとめと今後の課題

デューイ(2004)は、「経験」を重視し、人の成長とは、経験の意味を絶えず豊かにしていくことと考え、教育は、「経験の連続性」と「相互作用」という不可分に結びついた二つの原理に支えられているという(p.64)。「経験の連続性」とは、過

去から現在、現在から未来へと経験が継続していくことの重要性をさし、「相互作用」とは、個人と対象物または他者との間で常に進行している事柄で個人の環境や状況を構築する行為をさす。

本セミナーは、日本の学生にとって3か国からの参加者とジェンダー問題を介して多様な相互作用を経験する場となった。その意味でセミナーは多様な学びの経験を蓄積する契機となっており、教育的に意義あるセミナーになったのではないかと考える。特に「学び」を「教える」－「学ぶ」という対概念で捉えるのではなく、「かかわる」－「学ぶ」という視点で捉えることで見えてくる「学びの経験」ではないだろうか。

今後は、二人称的視点に立ち個々の参加者にとっての「学び」とは何かを追求することが、アクティブラーニングの効果を検証するうえで必要になってくるだろう。それには、エピソード記述(鯨岡,2005)などの手法も取り入れる必要があるかもしれない。それは、今後の課題としたい。

参考文献

- 青野敦子 (2008) 「ジェンダーの観点からみた中学生と高校生の職業態度」『心理科学』 29, pp.18-31.
- 青野敦子 編著 (2016) 『アクティブラーニングで学ぶジェンダー』 ミネルヴァ書房
- 宇井美代子 (2016) 「序章 ジェンダーをアクティブに学ぶこと・研究すること」 青野敦子 編著 (2016) 『アクティブラーニングで学ぶジェンダー』 ミネルヴァ書房 pp.1-12.
- 亀倉正彦 (2015) 『失敗マンドラを活用したアクティブラーニング授業の失敗事例分析とその知識化 —学生の「やる気」を引き出す観点から—』 *NUCB Journal of Economics and Information Science*, 59(2). Pp.123-143.
- 刈宿俊文・佐伯胖・高木光太郎 (2012) 『ワークショップと学び1 まなびを学ぶ』 東京大学出版会
- 鯨岡峻 (2005) 『エピソード記述入門』 東京大学出

版会

- 佐伯胖 (2015) 「そもそも「学ぶ」とはどういうことか: 正統的周辺参加論の前と後」『組織科学』 Vol.48, No.2, pp.38-49.
- デューイ, ジョン著 市村尚久訳 (2004) 『経験と教育』 講談社学術文庫
- バークレー, E.F. (2015) 「関与の条件: 大学授業への学生の関与を理解し促すということ」 松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター編著 『ディープ・アクティブラーニング: 大学授業を深化させるために』 勁草書房 pp.58-91.
- 松下佳代 (2015) 「ディープ・アクティブラーニングへの誘い」 松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター編著 『ディープ・アクティブラーニング: 大学授業を深化させるために』 勁草書房 pp.1-27.
- 溝上慎一 (2014) 『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』 東信堂
- 溝上慎一 (2007) 「アクティブラーニング導入の実践的課題」『名古屋高等教育研究』 第7号, pp.269-287.
- 森朋子 (2015) 「反転授業—知識理解と連動したアクティブラーニングのための授業枠組み—」 松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター編著 『ディープ・アクティブラーニング: 大学授業を深化させるために』 勁草書房 pp.52-57.
- Barr, R. B., & Tagg, J. (1995). From teaching to learning: A new paradigm for undergraduate education. *Change*, 27 (6). pp.12-25.
- (株) クラレ 「将来就きたい職業」
<http://www.kuraray.co.jp/enquete/occupation/2017/> (2018年1月15日 確認)
- 「はじめて子育てするママへ贈る歌」 (2016年)
<https://www.youtube.com/watch?v=3XzrzfgMP1c> (2018年1月15日 確認)
- 久保田真弓 (関西大学総合情報学部)